

綾歌町内遺跡発掘調査報告書

第 4 集

平成 1 1 年度国庫補助事業報告書

栗 熊 東 遺 跡

西 長 尾 城 跡

2000. 3

綾歌町教育委員会

はじめに

綾歌町には、縄文時代晩期以降の各時代に、先人の手になる文化遺産が数多く残されています。なかでも弥生時代後半期から古墳時代前半期にかけては、近年の発掘調査等により、かなり密度の高い内容であることが確認されています。

町及びその他の開発事業等に伴って発掘調査された様々な遺跡について、さらに調査研究を重ね、古代の生活等を明らかにするとともに遺跡を保護し、後世に伝えることは私達の使命であると考えます。

綾歌町では、平成8年度より国庫ならびに県費の補助によって綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても、継続して実施した調査成果としてこの報告書を発刊することになりました。

今年度は、栗熊東北内地区の町道拡巾工事に伴う事前調査として、栗熊東遺跡の試掘調査を実施しましたが、中世等の遺物が混入しているものの遺構等は確認されませんでした。

この地区は、栗熊遺跡、北内遺跡が近接しており、遺物・地形等から考慮すると南部微高地には、遺跡の所在が有力視されます。

さらに、平成8年度から継続実施している岡田上国吉地区での中世城郭跡として名高い西長尾城跡分布確認測量調査では、本丸から北東部にかけて延びる2筋連郭式郭列及びその周辺の遺構分布状況が把握されつつあり、西長尾城の内容解明に向けた資料整備が、着々とすすんでいます。

これからも、町内に所在する貴重な文化遺産を、後世に伝えていくためにも、調査の成果が貴重な資料として活用されることを望みつつ、当事業の継続的な実施を予定しております。

最後になりましたが、これらの調査にあたりましてご理解とご指導をいただきました県教育委員会文化行政課をはじめ関係各位、また調査にご協力とご援助をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

平成12年3月31日

綾歌町教育委員会教育長 土岐道憲

例 言

1. 本書は、綾歌町教育委員会が平成11年度国庫補助事業として実施した綾歌町内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査事業は、栗熊東遺跡、西長尾城跡を対象とした
3. 今回の発掘調査事業の現場に関する部分は、綾歌町職員近藤武司が調査員として担当し、綾歌町教育委員会新居勉が補助員として担当した。
4. 西長尾城跡の平板測量については近藤と新居が行った。
5. 栗熊東遺跡試掘トレンチ内の実測については、新居が行った。
6. 西長尾城跡の実測図は、新居が作成し、昨年度までの成果に合成した。また、栗熊東遺跡の製図は新居が行った。
7. その他、本書の執筆・編集は、近藤と新居が共同で行った。
8. 本書の実測図の縮尺は全てスケールで表示した。また遺構実測図中の方位は、栗熊東遺跡、西長尾城跡ともに国土座標第IV系による方位で示した。
9. 出土遺物及び図面は綾歌町教育委員会にて保管している。
10. 栗熊東遺跡試掘調査にあたっては、香川県文化行政課塩崎誠司氏のご指導ご援助を得た。ここに記して謝意を表する。
11. 挿図については、国土地理院の25,000分の1地形図を調製した綾歌町管内図（承認番号 四複第134号）及び綾歌町航空測量図を使用した。

目 次

本 文 目 次

第Ⅰ章	平成11年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要	1
第Ⅱ章	栗熊東遺跡試掘調査	4
	1. 地理的環境	4
	2. 歴史的環境	4
	3. 調査に至る経緯	5
	4. 調査結果の概要	6
	5. まとめ	6
第Ⅲ章	西長尾城跡測量調査	10
	1. 地理的環境	10
	2. 歴史的環境	10
	3. 調査に至る経緯	11
	4. 地形の概要	12
	5. まとめ	13
第Ⅳ章	まとめ	19

挿 図 目 次

第1図	平成11年度綾歌町内発掘調査事業対象地	3
第2図	周辺の遺跡分布状況	5
第3図	栗熊東遺跡トレンチ配置図	8
第4図	西長尾城縄張り図	11
第5図	今回までの調査範囲遺構分布状況	12
第6図	西長尾城遺構測量図	16

表 目 次

第1表	遺構一覧	14
-----	------	----

図 版 目 次

図版1	栗熊東遺跡全景（北より）	9
図版2	栗熊東遺跡全景	9
図版3	土層堆積状況（2トレンチ）	9
図版4	土層堆積状況（2トレンチ）	9
図版5	土層堆積状況（2トレンチ）	9
図版6	土層堆積状況（2トレンチ）	9
図版7	西長尾城遠景（北より）	18
図版8	伐開作業風景	18
図版9	連郭式郭列状況	18
図版10	連郭式郭列（第15郭より）	18
図版11	井戸跡（上部より）	18
図版12	竪堀遺構（上部より）	18

第1章 平成11年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要

平成8年度から国庫及び県費補助金により、綾歌町内に所在する遺跡の確認調査を実施しており、今年度についても同事業を継続して実施することになった。

国庫補助申請については、平成11年4月19日付けで提出し、平成11年6月16日付けで交付決定を受けた。

県費補助申請についても、同じく平成11年4月19日付けで提出し、平成11年8月18日付けで交付決定を受けた。

今年度については、栗熊東遺跡の試掘による分布確認調査と一昨年度より実施している中世城郭として町南部連山の城山に位置する西長尾城跡の測量による分布確認調査の2件の調査を実施した。

栗熊東遺跡については、当該地が周知の遺跡ではないが、綾歌町の実施する町道拡幅工事に伴い土器片が出土したこと及び手近に栗熊遺跡や北内遺跡が所在していることから、綾歌町と協議のうえ、試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、町道の拡幅巾が大きい現道西側にトレンチを設定して調査を進めたが、一部で土器片を含む包含層の確認があったものの、遺構の分布を確認することはできなかった。しかしながら、当該地は、南に面する地区より一段低く位置しており、包含層の状況からも、南部に遺跡の発見が期待でき、町道の拡幅工事について、綾歌町と今後の取り扱いについて協議を進めているところである。

西長尾城跡測量調査については、平成8年度より実施している遺構分布状況の確認を主体にした平板による測量を継続して実施することとした。

今回は、本丸から北東に延びる2筋の尾根のうち、西側の尾根の連郭式郭列最下団付近とその西側斜面の竪堀状遺構を中心に測量を実施した。

まず、昨年未測量部分の西側尾根上部から伐開作業を始め、尾根西側、尾根下部へと範囲を広げていった。また、伐開と並行して順次測量を実施した。西側尾根西斜面では、溜まりのある竪堀が2筋ほぼ北に向かって延びている。今回の調査では裾部の確認までには至らなかったため、全長の把握ができなかったが、次年度以降の調査で規模を明らかにしたい。

西側尾根では、未測量であった連郭式郭列の下部2郭の測量を済ませたことによって、西尾根の連郭式郭列の分布状況を確認することができた。

また、現在までに確認されている城内の移動ルートとして井戸のある谷から第17郭、第18郭、第19郭への連絡通路、さらに西側土塁を利用して第16郭、第15郭へと、第15郭からは、第5郭の升形虎口を経て上部郭群への通路が見られる。また本丸西側の第14郭への通路犬走りも見られる。本丸への通路が不明であるので今後の調査による解明が期待される。

2筋の連郭式郭列に挟まれた谷部分についても、今回までの調査によって、切岸や連続する竪堀状の遺構といった防塞施設が配置されていることが確認できたが、この正確な用途については不明であるので今後の調査による解明が期待される。

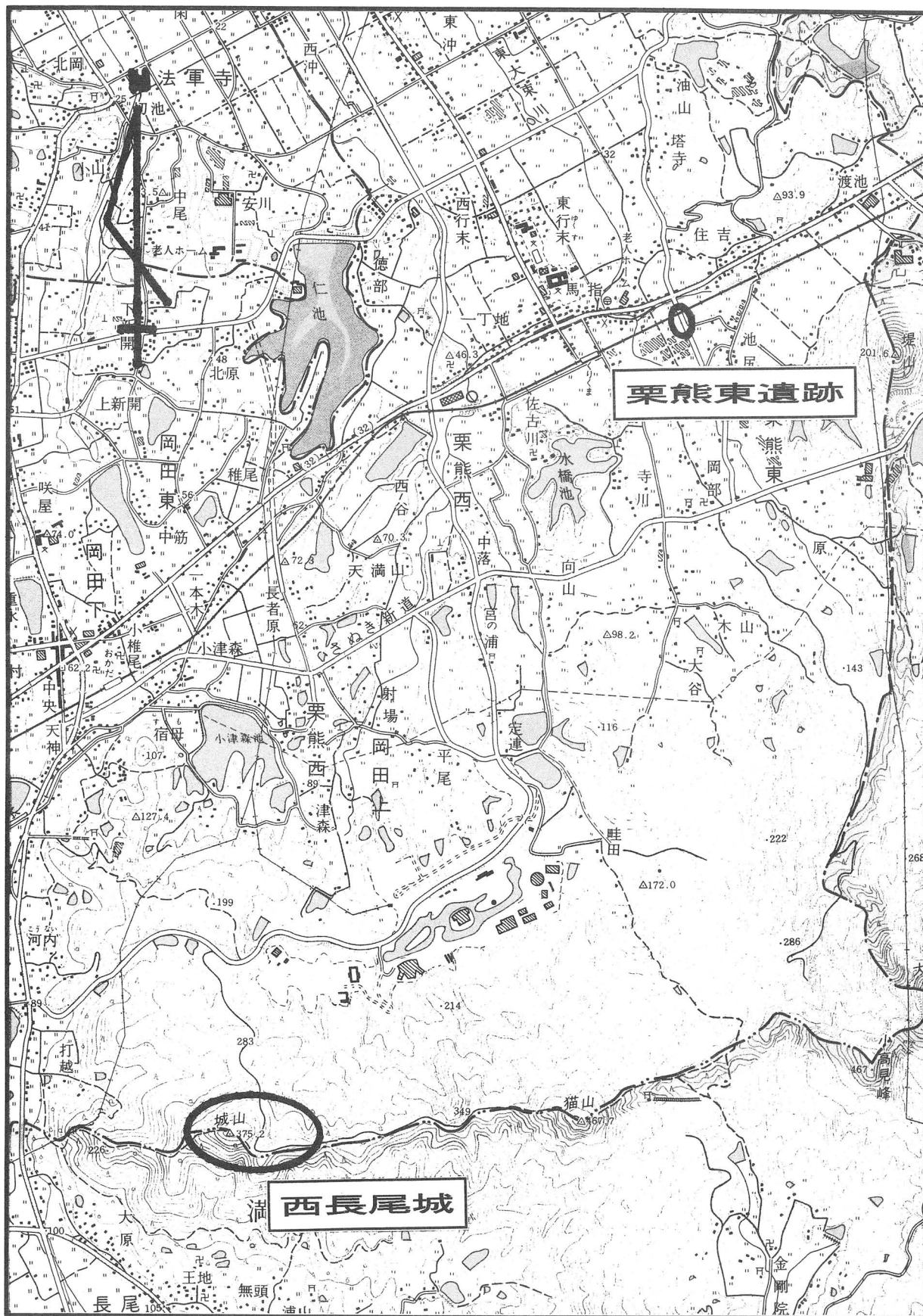
平成8年度からの調査により、本丸付近及び本丸から北東に延びる2筋の尾根に連なる連郭式郭列の分布状況等の調査を実施してきたことにより、主郭に関する主要部分について

ての大まかな内容は把握されつつある。

次年度以降については、東尾根に延びる櫓跡及びこれに付随する郭群について調査を実施し、西長尾城の性格及び全容を明らかにしていきたい。

以上、平成11年度の町内遺跡発掘調査事業は、町内2ヶ所にて確認調査を実施し、調査総面積は5,400㎡、調査期間は平成11年9月1日より実施し、平成12年3月31日に終了した。

第1図 平成11年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地



栗熊東遺跡

第二章 栗熊東遺跡試掘調査

調査対象地	綾歌町栗熊東字北内1548番地他
調査期間	平成11年10月8日～12月20日
調査面積	400㎡

1. 地理的環境

綾歌町は、香川県のほぼ中央に位置し、高見峰、猫山、城山の連山を南限とし、北側には肥沃な丸亀平野が広がる。

町域の北側は低丘陵を境にして飯山町と接し、また、北東部は横山連山を境に坂出市と接しているため眺望は遮られている。一方、北西部は土器川地域の沖積平野に向かって幾筋もの洪積台地の尾根筋が延びており起伏に富んだ地形を形成している。

また、町の中央部は、南方の連山に源を發した大東川水系に沿って盆地状の沖積平野が広がっている。

このように、綾歌町では地形・気候・水利にめぐまれ、生活するには非常にすぐれていることもあり、古くから人々の生活が営まれていたようである。

また、綾歌町からは、堤山北裾の低地を抜けると容易に綾川水系の沖積平野である羽床盆地にたどりつくことができるので、この地域とは密接に交流を行っていたと推察できる。さらに、大東川水系で結ばれた海浜部との交流も行われていたと推察される。

栗熊東遺跡は、大東川水系の水源でもある綾歌町南部の高見峰連山から北に広がる沖積平野に位置し、この沖積平野には、弥生時代の栗熊遺跡や、中世の住居跡遺跡である北内遺跡等が所在する。北側の丘陵上には、主体部に刳抜式割竹形石棺を3基持つ快天山古墳や薬師山古墳・住吉神社古墳が所在する。

2. 歴史的環境

綾歌町内では、ここ最近の発掘調査により行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡から縄文時代晩期の土器が発見されるようになってきた。遺構のについては、佐古川遺跡で掘立柱住居が1棟確認されているだけであるが、遺物の採取量からみても当該期には、既に人々の生活が相当規模で営まれていた地域であることは容易に推察される。

弥生時代に入ると次見遺跡、行末遺跡、行末西遺跡、佐古川遺跡、下土居遺跡、佐古川・窪田遺跡といった集落遺跡が確認されている他、墳墓としても平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が確認されている。

また、佐古川・窪田遺跡では、弥生時代前期後半から中期初頭にかけて築造された大規模な周溝墓群が確認されている。

古墳時代に入ると、集落遺跡は行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡でわずかに確認されているだけであるが、古墳についてはあらゆる所に多種多様なものが築造されるようになってくる。

快天山古墳、陣の丸古墳群に代表されるような有力墳が尾根上に築造されたり、岡田台地上には前方後円墳の車塚を中心として数十基の中小円墳から構成される岡田万塚古墳群古墳群が形成されている。

岡田万塚古墳群は早くからの開墾等によりほとんどが消滅しており、現在その姿を残しているのはわずか6基となっている。

古代については、原遺跡、庄遺跡、北原遺跡で集落跡が発見されている。

中世に入る頃には、坂出市と境界をなす横山山頂に横山廃寺が建造されたり、中世後半期には南部連山の城山で長尾大隅守元高が西長尾城を築造し、高見峰山塊にも栗隈城を築くなど、豊臣秀吉の四国征伐により滅ぼされるまでの二百年余り、その一族や土佐の長宗我部一族が勢力をほこっていた。

各時代を通じて近隣地域との交流が行われていたことを裏付けるように、他の地域で生産されたと思われる土器も多く発見されている。



- | | | |
|---------|---------|------------|
| ① 快天山古墳 | ② 栗熊遺跡 | ③ 北内遺跡 |
| ④ 南池下遺跡 | ⑤ 一丁地遺跡 | ⑥ 佐古川・窪田遺跡 |
| ⑦ 石塚古墳群 | ⑧ 堤池東遺跡 | ⑨ 行末遺跡 |

第2図 周辺の遺跡分布状況 (S=1:10,000)

3. 調査に至る経緯

綾歌町栗熊東北内・旭・岡部地区で平成10年度より町道馬指・原線道路改良事業が着手されていた。

この道路改良事業の北内・旭地区は、北内遺跡・栗熊遺跡に近接していることから、集

落遺跡の存在が予想されていた。平成10年度では、事前の連絡不備もあり、工事着工後の確認調査となったが、本年は綾歌町との協議により、平成11年10月14日付けで発掘調査の通知を提出するとともに、確認調査の準備に入った。

調査は、平成11年11月11日より開始し、平成12年12月10日終了した。

調査方法は、道路西側部分については、拡幅部分に合わせトレンチによる試掘調査を実施し、道路東側については、工事立会とした。

4. 調査結果の概要

調査地は、南部よりゆるやかな下り勾配を持っている微高地で、南部連山の犬高見峰から派生する尾根のほぼ先端部に位置する。調査地の南に面する地区からは僅かではあるが、段丘により下っていること及び、調査地北部の北内遺跡の状況から推察すると、遺構の分布は考えにくい、隣接する栗熊遺跡の範囲についても確認されていないことから、これに関連する遺構の分布の可能性については、否定できない部分もあることから、今回の調査の実施に踏み切った。

今回の調査では、南北方向に走る町道の西側拡幅部分について試掘調査を実施する予定であったが、東側については拡幅する幅が僅かであったため、工事立会とした。

西側については、4m前後の幅がとれるのでトレンチによる確認調査を実施した。また、試掘トレンチについては、1本で全域を通す予定であったが、調査地現況が田ということから、段差の生じる部分が出てくるので地形に合わせて設置することとした。

この結果、北部については殆ど遺物・遺構共に確認できなかった。南部については、中世の所産と考えられる土師器片を含む包含層が堆積していた。今回検出した遺物は、完形のものほとんどなかったが、皿、碗、土垂等、割合小型の土器が多く、生活拠点の所在を考えさせられるものであった。数量も相当量を検出した。しかしながら、遺構の確認ができなかったことから、これらの遺物については全て流れ込みであると考えるのが妥当である。また、地形は全体的に南部から北部にかけての下り勾配であることから、南部の一段登った台地上に集落遺構が展開していると考えられる。

今後、当該町道拡幅事業が南部に及んでくることから、遺構の確認も大いに期待できるものである。

5. まとめ

調査地は、丸亀平野に位置する条里制の東南部に位置し、北方に快天山古墳、北内遺跡が、西方に池下遺跡、佐古川・窪田遺跡が位置する。

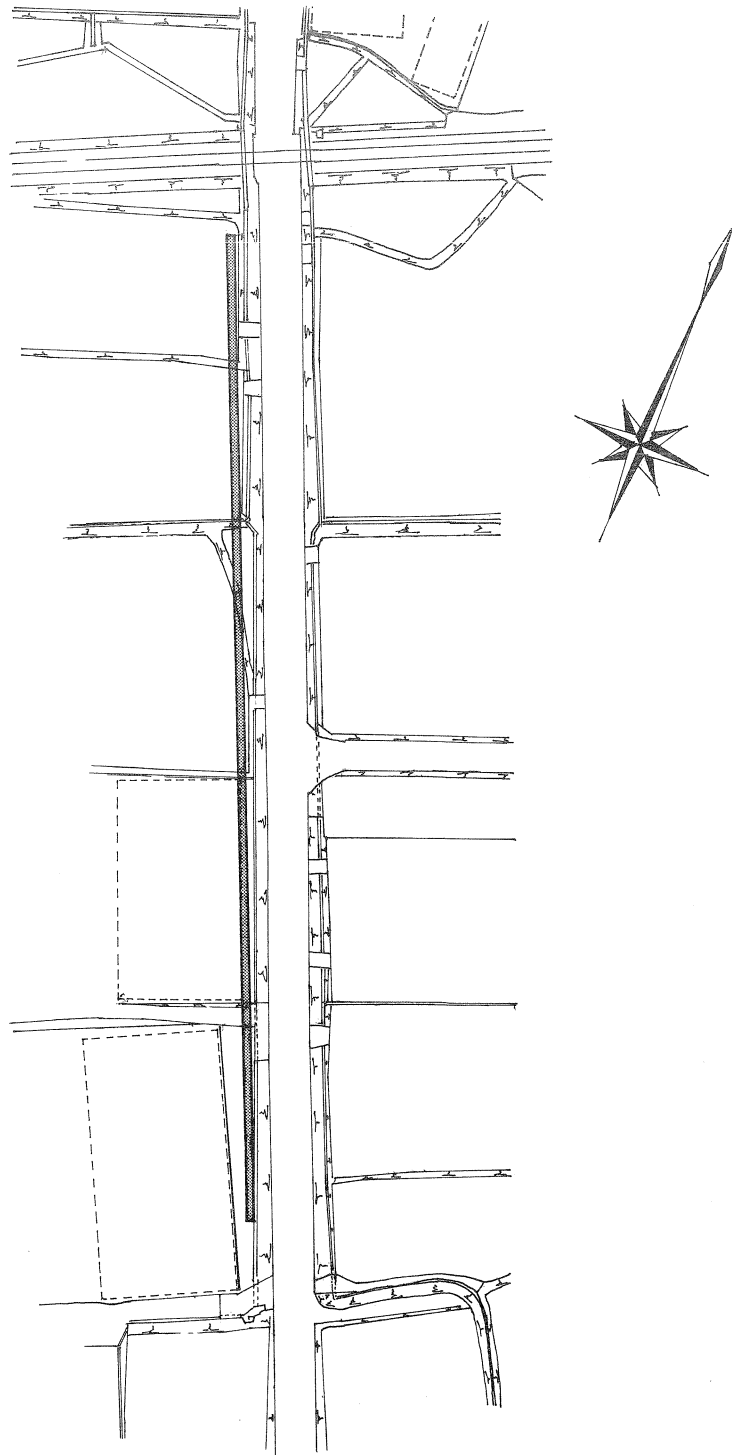
平成10年度の確認調査では、栗熊遺跡の最も接近している場所であったが、明確な遺構の確認ができなかった。本年の調査地は前年の北側で、北内遺跡に近接していることから、遺構の存在も期待できたが、試掘調査地では明確な遺構の確認はなされなかったが、埋土中からは、若干の須恵器片、土師器片が確認された。

土層は、近世の耕作土下は、南部からの流入と考えられる土層が堆積し、試掘トレンチの最下層に中世の包含層が広がっている。日程及び工程上、この包含層下部までの調査に至らなかったが、包含層はかなりの深さを有しており、遺構の存在の可能性は薄い。

以上のことから当該地で遺構の確認はできなかったが、南部には遺跡が存在する可能性

が非常に高くなったことから、今後の工事を進める際に十分留意する必要がある旨綾歌町
に対して報告すると共に、協議の下、適性な取扱いをする必要がある。

第 3 図



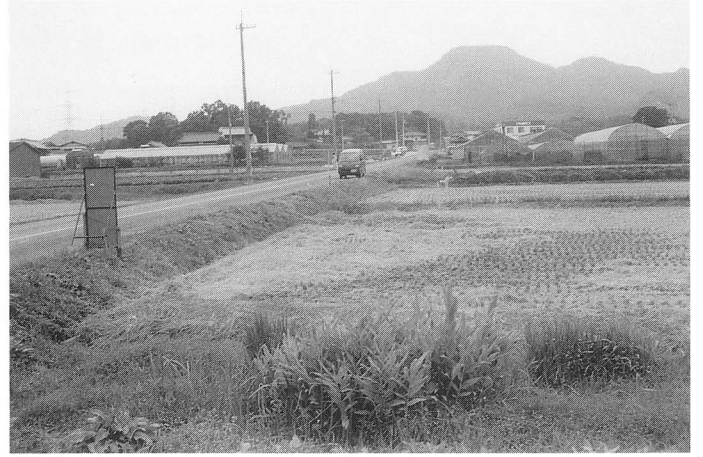
栗熊東遺跡トレンチ配置図

(S=1:1000)

栗熊東遺跡



図版 1 栗熊東遺跡全景（南より）



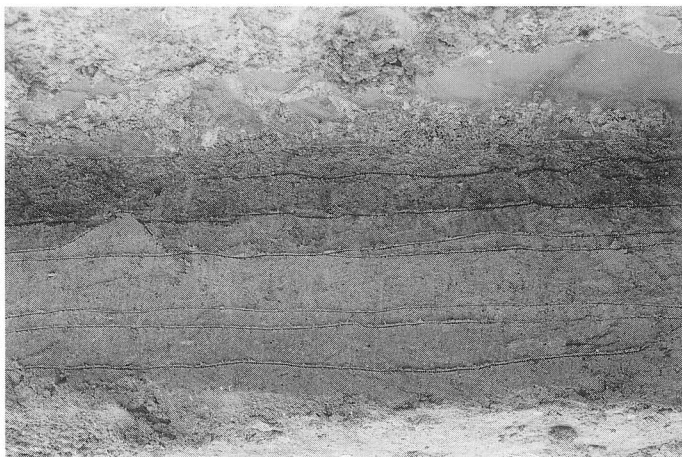
図版 2 栗熊東遺跡全景（北より）



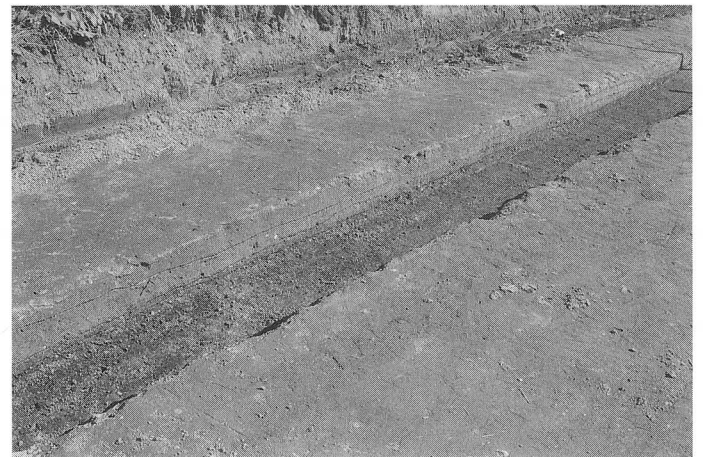
図版 3 トレンチ配置状況（南より）



図版 4 トレンチ配置状況（北より）



図版 5 土層堆積状況（1トレンチ）



図版 6 土層堆積状況（2トレンチ）

西長尾城跡

第三章 西長尾城跡測量調査

調査対象地	綾歌町岡田上字国吉 2 3 1 2 - 1 0, 2 3 1 2 - 1 3
調査期間	平成 1 1 年 9 月 1 日～平成 1 2 年 3 月 1 1 日
調査面積	5, 0 0 0 m ²

1. 地理的環境

綾歌町は、肥沃な丸亀平野の東南部に位置し、阿讃山脈の最前線をなす高見峰、猫山、城山の連山を南限とする。町北東部については、横山連山が南北に延びており平野部からの眺望は遮られている。北西部は土器川沿いの沖積平野に向かい、幾筋もの洪積台地の尾根筋が延びており起伏に富んだ複雑な地形を形成している。

町中央部については、南方の連山に源を発する大束川水系により盆地状の沖積平野が広がっており水利の便もよく、阿野郡条里の方格地割が現在においても良好に残存している。

西長尾城跡は南部の連山の中でも西端に位置する標高375.2mの城山(Siroyama)丘陵部に位置する。頂上からの視野は、東部については城山と同じ丘陵に連なる猫山、高見峰により視界を遮られるが、その他の方位については広く眺望することができる。

また、城山の南、西、北面は急峻な要害地形をなし、丘陵尾根や斜面上部を加工し郭等の防御施設の役割を果たしている。

2. 歴史的環境

綾歌町では近年の発掘調査により、平野部で縄文時代晩期の生活用土器が発見されるようになってきたことから、少なくとも3, 0 0 0年前頃には人々の生活が行われていたことが分かってきた。

弥生時代になると、行末遺跡に代表される前期の集落遺構が確認されている。後期に入ると次見遺跡や下土居遺跡また近年の発掘調査では行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、椎尾東遺跡、佐古川・窪田遺跡でも集落遺構が発見されている。このような人口と生産力の増大を背景に造墓活動も活発に行われてきたようで、南部の丘陵部に平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が形成されている。また、近年の発掘調査では、佐古川・窪田遺跡で最古級の周溝墓群が発見されている。

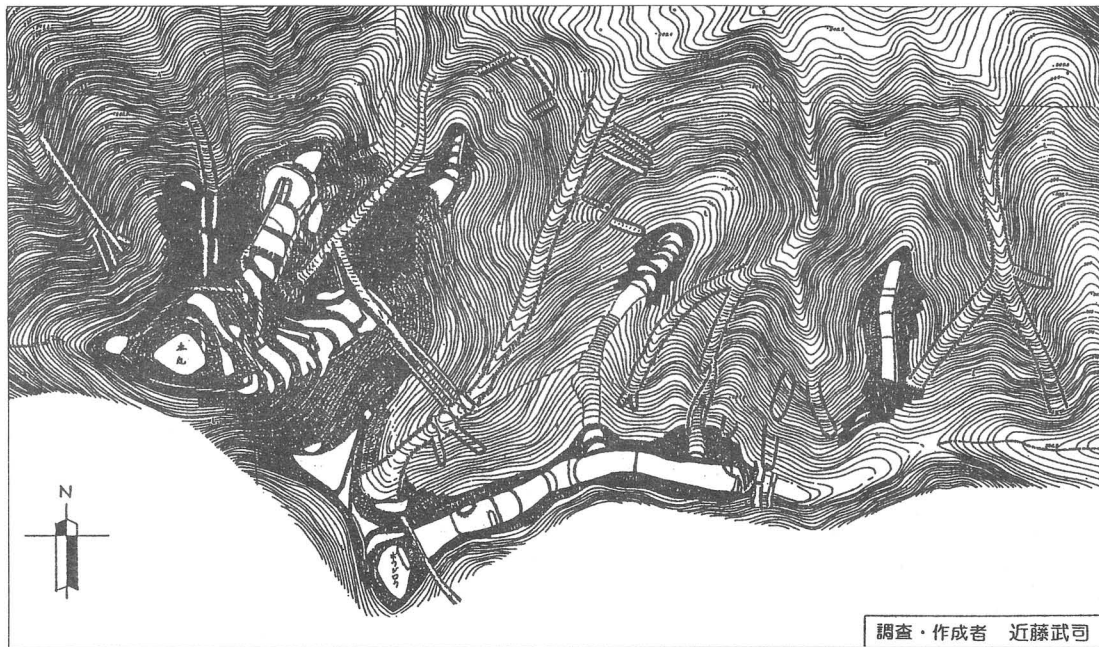
古墳時代に入ると町の西部では岡田台地上に岡田万塚古墳群、北原古墳のように多種多様な古墳が築造されていたり、東部では快天山古墳、陣の丸古墳群、横山古墳群、横峰古墳群等の築造、集落遺構としては行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、佐古川・窪田遺跡が確認されている。

特に弥生時代後期から古墳時代にかけては、遺跡の密度も高く非常に栄えていた時期であることがうかがえる。

古代には、原遺跡、北原遺跡で集落が確認されている。

中世に入る頃には坂出市との境界をなす横山山頂に横山廃寺が建造され、後半期に入ると南部連山の城山に西長尾城が築城される。また、集落としては昨年の調査により岡田台地で北山遺跡が確認されている。

西長尾城は、三野郡詫間郷宮御崎を領して海崎伊豆守と名乗り白峰合戦での軍功を認め



第4図 西長尾城縄張り図 (S=1:4, 000)

られた長尾大隅守元高が応安元年(1368)城主となり、その後土佐の長宗我部元親配下の国吉甚左衛門の居城となり、天正13年(1585)の豊臣秀吉の四国征伐により廃城になるまでの二百年以上に渡って長尾一族及び長宗我部一族により守られてきた城である。

その間に長尾一族はこの地で勢力を伸ばして炭所、岡田、栗隈などに城を構えて阿野、鶴足、那珂郡の南部で勢力を誇った。

3. 調査に至る経緯

綾歌町は、綾歌町岡田上国吉地区から栗熊西平尾地区に至る約250.34ヘクタールを、綾歌町森林公園として整備を進めているところである。この中には城山を中心に広がる中世城郭跡の西長尾城跡の整備に関する計画も含まれており、どのような形で計画を進めていくのかを現在検討しているところである。

西長尾城について記述のある文献もあり、現在、西長尾城保存会を中心に研究をしているところであるが、内容の詳細については不明な状態であるので、町教育委員会では適切な調査をし、西長尾城の内容を把握したうえで整備計画を進めていくため、平成8年度より平板による測量調査を実施して、基礎資料作成作業にとりかかっており、四年目となる今年度についてもこの事業を継続して実施することになった。

測量調査にあたって、測量調査体制を整えると共に、まず香川県西部林業事務所と協議し、調査の為の立木伐採の許可を得て、平成11年9月1日より本格的な調査に入った。

立木伐開作業については、綾歌町シルバー人材センターへの作業委託とし、平成11年9月2日から同年10月18日までの17日間で実施し、延べ人数は65人であり、委託内容は、伐採・結束・搬出等の作業とした。

伐開範囲は、本丸から北東に延びる2筋の尾根の西側の谷筋及び尾根下部に所在する連郭式郭列部分と2筋の尾根の間の井戸跡の点在する谷筋下部とした。伐開総面積は約5、

000㎡となった。

平板による測量調査については、調査員及び補助員の業務の都合及び日程的な制約の中であったが、ほぼ伐開した範囲について調査を実施することができ、主郭部の本丸から北面にかけてはほぼ分布内容を押さえることができた。今回実施した測量面積は約5,000㎡であった。

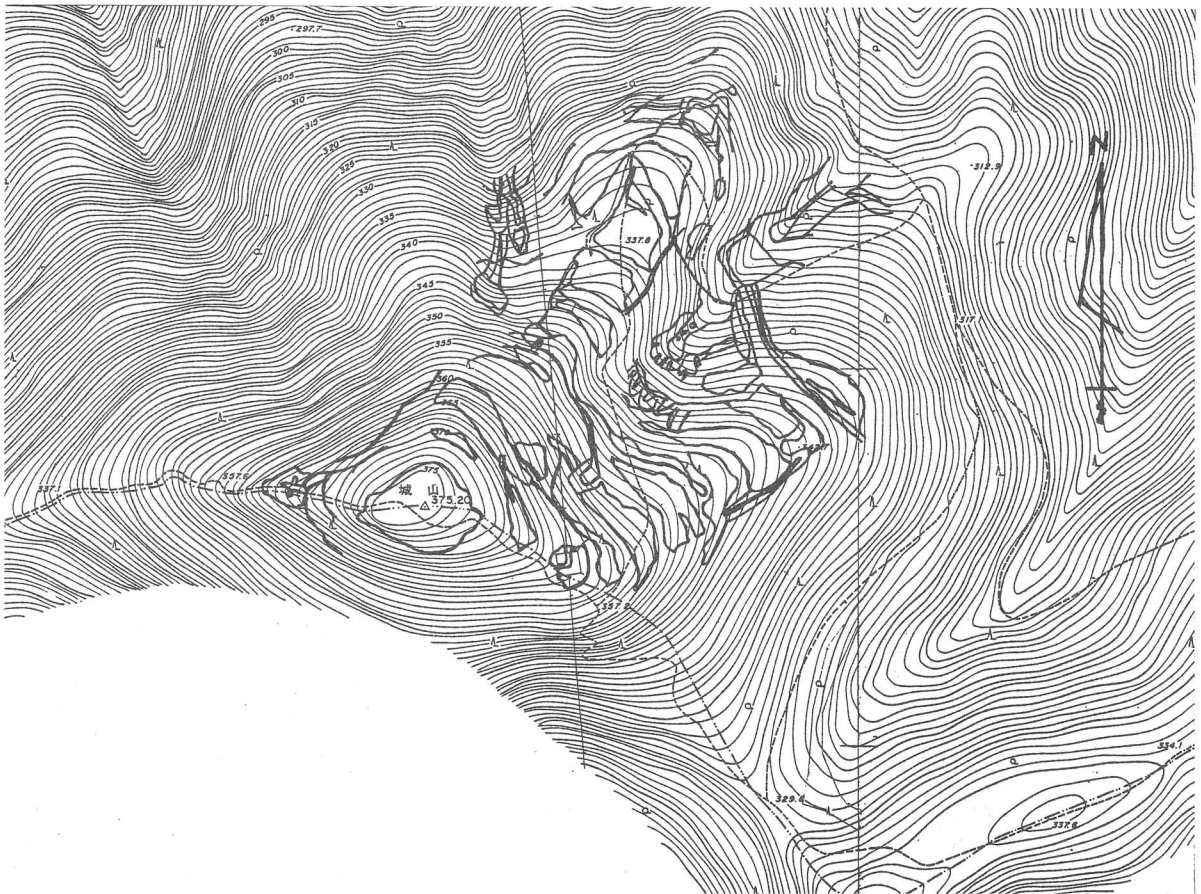
なお、発掘調査の報告については、平成11年9月10日付け綾歌教委発第299号で提出した。

4. 地形の概要

昨年度までに実施した遺構分布確認測量調査によって約14,000㎡については遺構の分布が確認されている。

山頂部（本丸跡）より北東方向に2筋の稜線が走っており、その東側の尾根上には連郭式郭列が大小合わせて10段設けられ、西側の尾根上にも同様に連郭式郭列が12段連なっている。

東側の郭列については、下から3段において南東肩に高さ1メートル、長さ30メートルにわたる土塁が造られており、西側の郭列についても、同様に北西端にそれぞれの郭に連続するように土塁が設けられている。このことについて推察すると北からの攻撃に対する防御と併せて、東側及び西側についても警戒していると考えられる。



第5図 今回までの調査範囲遺構分布状況 (S=1:1, 000)

西側の尾根筋との間には唯一の水源となる谷筋があり、4基の井戸が設けられていることから、この水源を守る水の手郭の役目をもっていただけものと推察される。

なお、この井戸については積石もみられるが湧き水を汲み上げるのではなく雨水等を溜めるものと考えられる。

昨年の調査によって、この井戸郭の奥付近の斜面に大小12本の連続する畝状の堅堀が検出されている。これらの連続堅堀の用途については、根拠づけられる内容の確認がなされていないため、今後の研究課題となる。現段階の見解としては、この西長尾城の防御施設が、連郭式郭列やその外側に設けられた土塁・堀切及び堅堀だけでなく、城内にあたるこの井戸郭のある谷筋においても他の侵入を遮るために設けられていると考えている。

西側の連郭式郭列については、郭と郭の段差は概ね2メートル前後で奥行き10メートル、幅15メートル前後のものが北東に向かって連続して設けられている。その内、中間部分にあたる5段について西肩部分は土塁によって連なっている。また、この土塁からそれぞれの郭に進入するような通路状になっていることから、この土塁は城内移動用の通路及び各郭への虎口も兼ねて設置されているようである。

さらに、この西側の郭列において西長尾城の旧城から新城への変遷における改築の痕跡が確認できる。第17郭から第19郭については下段の郭に面する肩部分が直線状に成形されており、そのそれぞれが平行に調整されていることから計画的に手を加えられたものと考えられる。

また、西長尾城内の通路については、未だ全体像は掴めていないが本丸周辺の移動ルートにおいて、判明しつつある。まず井戸跡より西尾根の第19郭虎口近くに至り、さらに上部の第18郭及び第17郭へのルートである。そして、第15郭より第5廓西部の榊形虎口をへて、第4郭から第12郭に至る途中に合流し第1郭に至るルートである。さらに第15郭より上部の兵隊溜を経て本丸西側の第14郭に至る犬走りである。一部後世の改築がみられるが、ほぼ当時の縄張りの可能性が高い。

5. まとめ

中讃を一望できる位置に所在する西長尾城は自然の要害地形を巧みに利用し、さらには複雑な防塞施設を備えることにより、より一層強力な防衛力を保持している。

平成8年度からの調査によって、西長尾城の城郭構成が着々と解明しつつある。これらの成果は、今後の調査結果と併せることにより、この地域における中世城郭の研究課程において、模範となり得る貴重な資料になると考えられる。

しかし、未だ未調査部分が多く、今後の課題も多く残されていることから、次年度以降についても当該調査を継続して実施していくことにより、西長尾城についての基礎資料の整備を早急に進めていきたい。

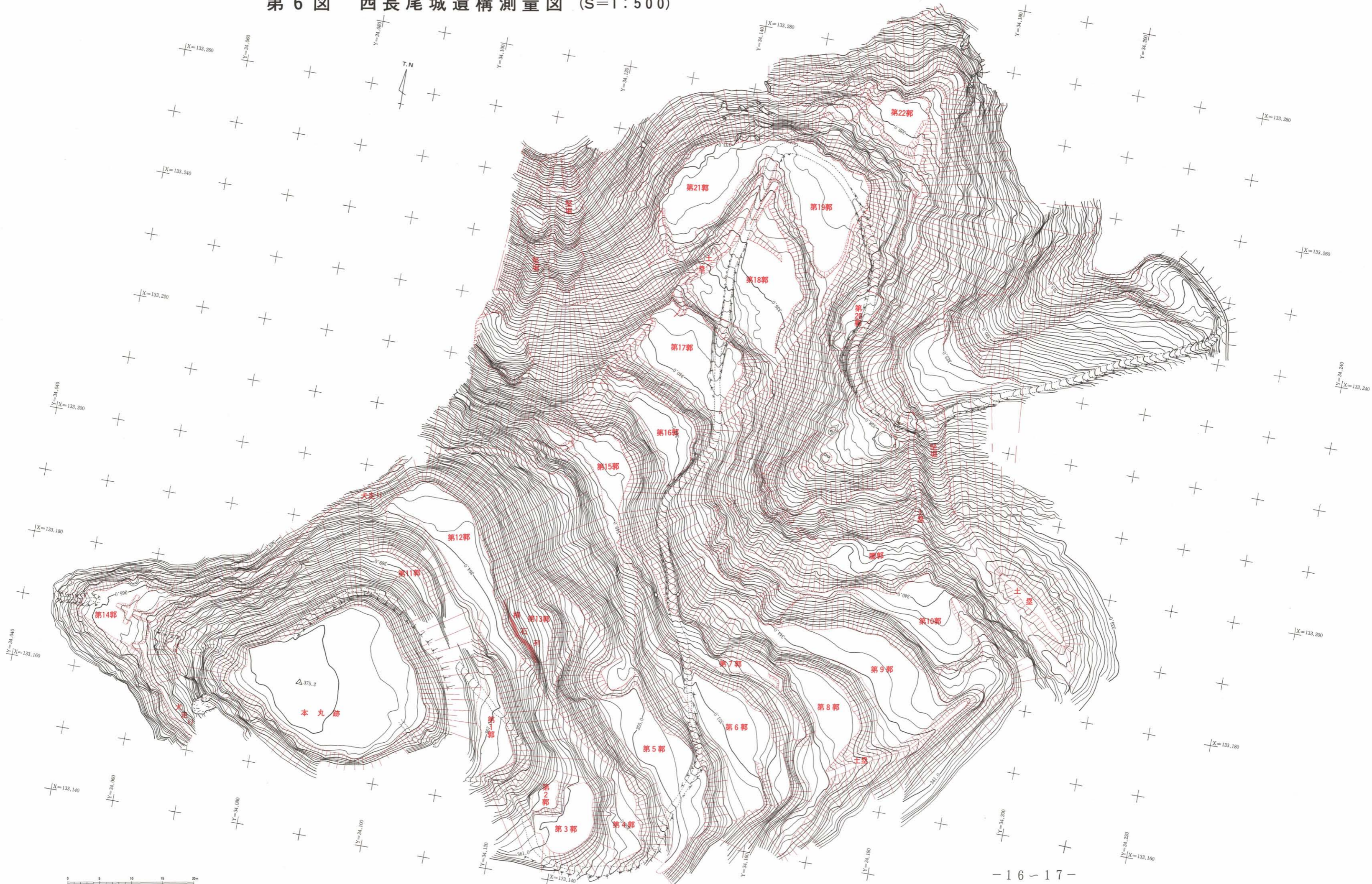
第 1 表 遺 構 一 覧

(No. 1)

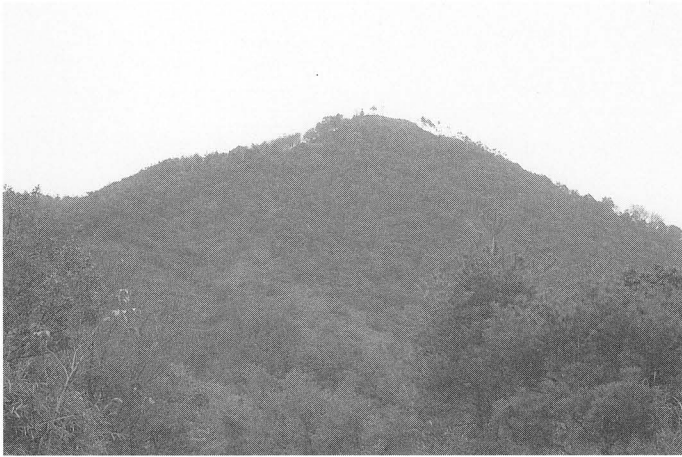
遺構の所在地	郭						郭等の付属施設			
	名称	形状	規模 (m)	上段郭との高低差 (m)	備考	名称	場所	規模 (m) 長さ×幅×高さ (深さ)	備考	
山頂部	本丸跡	台形	23.0×22.0	—	礎石と思われる石が散布 以前瓦の散布もあった 登山道で一部破壊					
山頂部の東尾根	第1郭	三角形	18.1×5.2	7.5	登山道で一部破壊					
山頂部の北東尾根 (東側)	第2郭	三角形	6.5×4.0	4.5	登山道で一部破壊					
	第3郭	不定形	12.0×5.0	0.8	登山道で一部破壊					
	第4郭	不定形	14.5×5.3	2.0	登山道で一部破壊					
	第5郭	不定形	29.5×7.8	2.3	登山道で一部破壊					
	第6郭	不定形	30.1×9.5	2.5	登山道で一部破壊					
	第7郭	不定形	28.8×2.0	2.3	登山道で一部破壊					
	第8郭	不定形	30.5×7.2	3.2						
	第9郭	不定形	37.0×8.0	2.1						
	第10郭	不定形	18.0×8.7	2.3						
						土塁	南東肩	28.6×4.0×1.0		
						土塁 腰郭 堀切 竪堀	北東肩 北東段下 北西段下 北東段下 堀切と連続	5.5×2.0×0.5 27.6×7.7×1.0 16.0×5.5 30.2×2.0×1.5 20.9×8.0×3.3		

遺構の所在地	郭						郭等の付属施設			
	名称	形状	規模(m)	上段郭との高低差(m)	備考	名称	場所	規模(m) 長さ×幅×高さ (深さ)	備考	
山頂部の北東尾根 (西側)	第11郭	不定形	13.3×3.0	4.8						
	第12郭	不定形	33.0×7.3	4.0						
山頂部の西尾根	第13郭	三角形	11.5×6.0	2.2		積石列	南西側法面	13.5×2.0		
	第14郭	不定形	10.5×11.0	9.0	瓦片の散布 登山道で一部崩壊	犬走り	東部南北端	幅1.0		
山頂部の北東尾根 (西側)	第15郭	台形	17.2×5.5			虎口 虎口	東南端 西部両端	幅1.0 幅1.0		
	第16郭	台形	13.5×7.4	4.0		虎口	西部両端	幅1.0		
	第17郭	台形	17.0×11.1	3.5	登山道で一部破壊	土塁 虎口	北西肩 東西両南端	幅1.0		
	第18郭	不定形	16.6×18.2	2.8	登山道で一部破壊	土塁 虎口	北西肩 東南端			
	第19郭	三角形	19.0×12.2	2.0	登山道で一部破壊					
	第20郭	台形	10.0×2.8	3.0	登山道で一部破壊					
第21郭	三角形	.0×.	.0		土塁	南西肩				
第22郭	台形	.×.	.0							

第6図 西長尾城遺構測量図 (S=1:500)



西長尾城跡



図版7 西長尾城遠景（北より）



図版8 伐開作業風景



図版9 連郭式郭列



図版10 連郭式郭列（第15郭より）



図版11 井戸跡（上部より）



図版12 豎堀遺構（上部より）

第 IV 章 ま と め

綾歌町では、平成 8 年度から国庫及び県費補助により綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても継続して実施することになった。

今年度については栗熊東北内地区栗熊東遺跡及び岡田上国吉地区西長尾城跡の 2 地区を対象に調査を実施した。

栗熊東遺跡は、昨年度より着工された町道馬指・原線道路改良工事に伴う事前調査であり、試掘確認調査を実施した。

調査は、試掘トレンチを主体とした土層及び包含遺物による遺構分布確認調査であり、土層図を作成した。

この結果、栗熊東遺跡は、中世を中心とした遺物の検出が見られるものの、遺構の検出はなく、遺跡の特定には至らなかった。近接して、栗熊遺跡・北内遺跡があり、いずれかの遺跡の流入ともかんがえられる。

西長尾城跡は、岡田上国吉地区城山を中心に展開する中世城郭として古くから知られており、部分的に後世の開発等により破壊されているものの、ほぼ当時の姿を現在まで伝えている。

綾歌町が実施する町森林公園整備計画を進めるなか、その範囲内に所在する西長尾城跡の取り扱いについて様々な論議が交わされているが、西長尾城跡がどのように分布しているのかについての十分な資料の整備ができていなかったことから、協議も滞っている。

そこで綾歌町教育委員会では、平成 8 年度から西長尾城跡の遺構分布確認調査を実施し基礎資料の作成にとりかかっている。

調査は、平板測量による遺構分布確認調査で、今年度は本丸北東に延びる 2 本の尾根の内、西側の尾根の西谷筋と両尾根の下部部分の約 5, 0 0 0 m²の測量を実施した。

今回の測量については、調査の精度と効率化を図るため 2 1 点の測量基準点と 7 4 点の図根点を設置した。尚、新設基準点の設置範囲は今年度の調査範囲及び次年度の調査範囲とした。

今年度の測量調査の結果、本丸から北東に延びる尾根の内、西側の尾根についてはすでに連続する 9 郭の確認がなされているが、残り 2 郭の調査を実施した。本調査で西側の郭列は 1 1 郭となった。この郭列は、他の尾根の郭列と異なりほぼ縄張りが並行に揃うように計画的に構築されようとしている。すなわち、第 1 9 郭の北端と第 1 6 郭及び第 1 7 郭の北端はほぼ並行線となっており、第 1 5 郭及び第 1 8 郭に成形の痕跡を観ることができると。

本尾根の西側谷筋に、2 本の堅掘が並行に掘られている。堅掘裾まで調査をしていないので、全長は把握していないが、第 1 5 郭西側谷筋急傾斜地 3 4 5 m に起点をもち、各所に溜まりがある U 字形の堅掘である。

以上、今年度は上記 2 遺跡の調査を実施した。栗熊東遺跡については、開発に伴う調査として実施し、また、そうでないものとして西長尾城跡の測量調査を実施した。

西長尾城跡については、次年度以降も継続的に調査を進め、早い段階で全体像を掴めるような資料づくりをしていきたいと考えており、今後、当該事業を実施していくうえで、この調査で得た成果を効率的に活用していきたい。

また今後の開発計画についても、この調査成果に基づき的確な遺跡の保護についての提示をするとともに、事前協議を進めていき、文化財行政の活用・保護についての貴重な資料としたい。

報 告 書 抄 録

ふりがな	あやうたちょうないいせき はくつちょうさ ほうこくしょ							
書 名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書							
副 書 名	平成11年度国庫補助事業報告書							
巻 次	2000. 3	シリーズ名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書	シリーズ番号	第4集			
編集者名	綾歌町教育委員会 副主幹 新居 勉 調査員 近藤 武司							
編集機関	綾歌町教育委員会							
所在地	〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西1638 TEL0877-86-5963 EXT234							
発行年月日	2000年3月31日							
頁 数	例言・目次等	本 文	図 版	総 頁				
	5頁	18頁	12枚	25頁				
ふりがな	所 在 地	コード		北緯	東経	調 査 期 間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
くりくまひがしいせき 栗熊東遺跡	綾歌町栗熊東 字北内1548他	37384	00175	34度 13分 51秒	133度 53分 21秒	1999. 10. 08~1999. 12. 20	400	道路改良
にしながおじょうせき 西長尾城跡	綾歌町岡田上 2312-10, 13	37384	00035	34度 12分 1秒	133度 52分 11秒	1999. 09. 01~2000. 03. 11	5000	遺跡分布調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主な遺構	主な遺物	特 記 事 項		
栗熊東遺跡		奈良・平安			土師器片 須恵器片			
西長尾城跡	山城	室町		郭 堀切 井戸 土塁	瓦片 土師器片			

平成11年度国庫補助事業報告書
綾歌町内遺跡発掘調査報告書

平成12年 3月31日

編集・発行 綾歌町教育委員会

綾歌郡綾歌町栗熊西1638

電話(0877) 86-5963

印刷 四国工業写真(株)